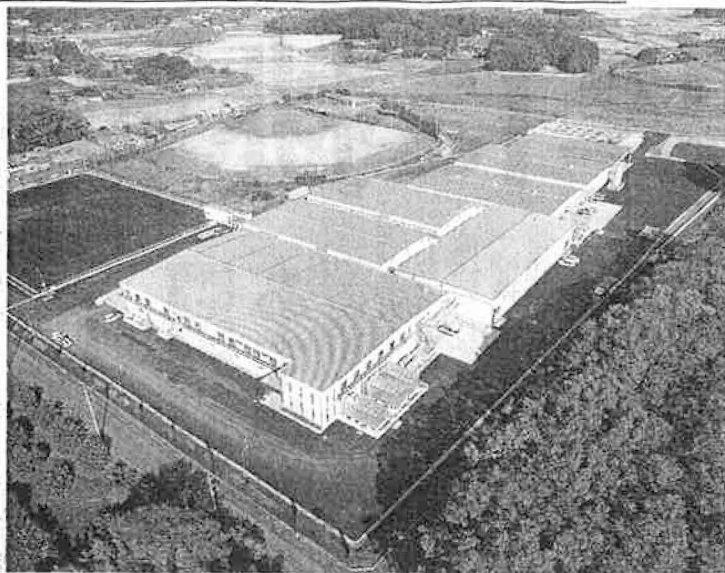


カット野菜の新工場

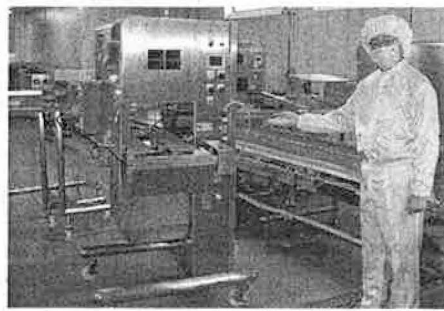
来年2月稼働 生産能力を倍増

野菜加工製造の旭物産（水戸市平須町、林正二社長）は、旧内原工場跡地（同市高田町）にカット野菜の新工場を建設した。現在の水戸本社工場を拡張移転する形で、来年2月に本格稼働する。カット野菜は、スーパーやコンビニエンスストアで需要が拡大しており、生産能力を従来の2倍に増強する。



生産能力が2倍に拡大する旭物産の新本社工場（同社提供）

新工場は、サラダ用や薬味ネギなどカット野菜の需要増大に対応するため、総事業費約40億円を投じて整備した。作業場や倉庫、製



新工場の設備を説明する林正二社長＝水戸市高田町

品冷蔵庫、事務所など計7棟で構成し、延べ床面積は約1万3700平方メートル。原料搬入から加工処理、出荷まで一貫して行う。

製造ラインは19本設け、生食用のカット野菜を生産する。現在1日当たり25万パックの生産能力を50万パックに倍増。これまで人の手で行ってきた野菜の下処理や洗浄後の脱水など多くの工程を機械化し、効率化する。

旧内原工場跡は、同社にとって創業の地。新たに周辺の土地を取得し、総敷地面積は約7万4千平方メートルと、2014年12月に着工し、今年11月に建屋が完成。内装工事や製造設備の設置を進め、来年2月の本格稼働に併せ、本社も同敷地内に移転する。

少子高齢化により、市場縮小が見込まれる中、手軽に調理できるカット野菜は近年、1人暮らし世帯や高齢層を中心に需要が急増している。

同社では売上高が4年連続で増加。モヤシを取り扱

う小美玉工場（小美玉市）や、ダイコンのつまを扱う銚田工場（銚田市）の分も含め、16年9月期の売上高は、前年比13億円増の125億円に伸びた。さらに今後3年以内に、売上高を150億円に引き上げるとしている。

林社長は「顧客の要望に答え、安定供給を目指す」と話し、新工場の生産能力アップに期待。同時に「熱を加えたり味付けしたり、カット野菜に付加価値を持たせたい」として、新商品の開発にも取り組むとしている。（松崎亘）